

第3回海水・生活・化学連携シンポジウム開催報告

第3回海水・生活・化学連携シンポジウム実行委員委員長 倉科 昌*

日本海水学会若手会では去る平成28年10月13、14日に第3回海水・生活・化学連携シンポジウムを開催しました。このシンポジウムは、東日本大震災の被災地のために何か活動したいとの会員からの声を受けて平成26年度から開始したものです。シンポジウム開催の目的は2つあります。第一には当然ながら学術交流を行うことです。第二には、被災地を訪問して被災・復興の状況を学び、被災地の重要な課題の1つである震災の風化防止に貢献することです。第1回(平成26年)のシンポジウムでは岩手県一関市で講演会を、陸前高田市で見学会を行い、昨年第2回(平成27年)では講演会および見学会を宮城県石巻市で開催し、多くの方にご参加頂きました。

第3回となる今回は福島県で開催することとなりました。若手会会長の松本真和先生(日本大学)を通じて日本大学工学部の児玉大輔先生にご尽力いただき、郡山市の日本大学工学部50周年記念館(ハットNE)という立派な会場を講演会に使わせていただくことができました。

シンポジウムの内容は、第一回、第二回と同様に招待講演、ポスター発表会、交流会それに見学会です。招待講演者は福島工業高等専門学校 車田研一先生、株式会社クレハ 大田原健太郎様、元福島県相馬市消防団第3分団 分団長・相馬市議会議員 立谷耕一様をお迎えすることになりました。本シンポジウムの講演会の事前登録参加者は42名でしたが、佐藤健二先生(日本大学)に声をかけていただいたおかげで日本大学工学部の学生さんの当日参加があり、合計の参加者は50名を超えておりました。

シンポジウム開催にあたって、実行委員長である私から開催の趣旨について説明させて頂きました。最初は福島工業高等専門学校 車田研一先生で「最終埋立処分場の排水系をめぐる環境工学 一産学連携での挑戦と課題」としてご講演いただきました。焼却灰等の埋立処分場の地下に埋設する排水管内部に析出するスケールについて、それがカルサイ

トであり、さらにバクテリアにより生成するというバイオセメンテーションであることをご説明いただきました。その上、この作用を利用して排水管に集まる前の水中にカルサイトを生じさせる研究もされているとのことで、現象に対して原因を見つけ、さらに対策まで行うという一貫した素晴らしい研究をご発表いただきました。続いて株式会社クレハ 大田原健太郎様に「震災経験と復興に向けたその後の取り組み」としてご講演いただきました。外部技術によらず、独自技術による塩化ビニリデンの開発をはじめとして、クレハは自社開発の技術による売上げが全体の6割とお聞きしました。およそ1km四方のクレハいわき事業所に生産を集中しているそうですが、3月11日の震災、さらに4月11、12日の大きな余震により非常に大きな被害を受けています。物資等が入ってこない状況だったにも関わらず、しかしながらそこから驚異的なスピードで復旧をされています。クレハグループの総力を結集してされたことかもしれませんが、いわき事業所は2004年頃からハード、ソフト両面から地震や緊急事態の対策を実施しており、これほどの被害でも危険物等の環境影響を及ぼす事故や重大な人身災害は無く、地震から12分後には現場指揮本部の設置がされていたそうです。独自技術開発企業の気風と事業所の一体感もあったとはお聞きしましたが、事前の十分な準備の必要性を痛感いたしました。

休憩ののち、場所を移してポスターセッションを行いました。ポスターは合計で31件と、前回と同数でした。日本海水学会の会員でない方にもご参加頂いておりますので、年会などでは見かけない分野の発表もあり、シンポジウムで目指している異分野の学術交流が実現していました。会場はポスターセッションをするのにゆとりを持った十分な大きさで、発表する方も話を聞く方も快適だったと思います。

シンポジウム最後の講演では、元・相馬市議会議員 立谷耕一様に「震災に対峙して、自分の命を守

*徳島大学大学院理工学研究部 〒770-8506 徳島市南常三島町2-1

る大切さ」として、当時福島県相馬市消防団第3分団 分団長としてのご自身の被災経験をお話いただきました。最初から津波の強烈な映像で始まりましたが、実際の避難誘導や救助の様子、またご遺体の搬送の様子を生々しく語っていただきました。このような災害の際に、現場で真っ先に対応するのは消防団の方々であることを改めて知りました。後ほど調べたことではありますが、各地の消防団の方々がそれぞれに、うまくいった場合もそうでなかった場合も含め、奮闘されたことを知りました。立谷様のお話の最後にもありましたが、消防団の方々の避難の指示には迅速に従うことが、自分の命を守るうえで重要だと感じました。最後に、若手会会長の松本真和先生（日本大学）から講演とポスターの部を締めくくる言葉がありました。

交流会は会場をホテルプリシード郡山に移して行われました。若手会を長年に渡ってご支援を頂いている東郷育郎先生（サンアクティス）のご挨拶を頂き、ポスターセッションの優秀者の表彰が行われました。発表されたポスターはいずれも興味深いものでしたが、選考の結果、土屋侑子さん（日本大学）、長嶋恭介君（日本大学）、鈴木優美さん（神奈川工科大学）、橋本なつみさん（神奈川工科大学）の4名が選ばれ、松本先生から賞状と記念品が授与されました。おいしい料理を囲み、講師の先生方も交えて楽しいひと時を過ごしました。

翌朝は郡山駅に集合し、見学会へと出発しました。見学会には講師のお三方も参加され、参加者は合計で38名でした。まずは貸し切りバスで30分ほどかけて福島県農業総合センター（郡山市）へ向かいました。そこでは安全農業推進部 指導・有機認証課 主幹（兼）副部長（兼）課長の草野憲二様から、農林水産物の放射線モニタリングについてご説明いただき、検査分析室を見学させていただきました。販売される農林水産物が検査されており、11台のゲルマニウム半導体検出器で1日に150点、年3万点もの測定がなされているそうです。それでも取り違えなく、精度等も含めて正確なデータを提供するこ

とを主眼に置かれているそうです。森林の除染がまだのため、それ由来のキノコ等には基準値越えがあるものの、他の作物は昨年度から問題ないそうです。多くの見学者が国内外から訪れるそうで、国内に対しては福島県代表として、海外に対しては日本代表として正確な情報を発信しているとのこと。

その後、バスで1時間ほど移動して星の村天文台（田村市）に移動しました。ここでは副台長の大野智裕様から、被災した65cm反射望遠鏡とその復旧についてご説明いただきました。地震により床を抜いて落下した望遠鏡ですが、主鏡が無事であったことと、全国からの寄付と補助金で再建できたそうです。見学では投影板を用いない方法で太陽を観測させていただいたのですが、参加者の皆様もプロミネンスとコロナに興味深く見ていました。

本シンポジウムの企画運営では、会場を手配していただいた日本大学工学部の児玉大輔先生、日本海水学会の皆様、若手会の皆様、学生の皆様をはじめ、本当に多くの皆様のご支援を頂きました。日本大学工学部内の案内看板は日本大学工学部庶務課の村上進之介様に設置していただきました。見学会の手配にはふくしま観光復興支援センターの佐藤靖典様、福島県農業総合センターの金丸雄太郎様のお力添えを頂きました。趣旨にご賛同下さり、協賛頂きました団体の皆様、要旨集への広告掲載や寄附によってご支援して下さった企業の皆様、日本海水学会の行事に初めて参加して下さった他学会会員の皆様に深く感謝申し上げます。

精算がまだ終了していませんが、本シンポジウムの黒字額は20万円程度となる見込みです。これは、福島県の震災孤児・遺児に対して生活及び修学を支援している「東日本大震災ふくしまこども寄附金」へ寄附させていただきます。

次回は平成29年度に、第1回シンポジウムを行った岩手県に戻って開催する予定です。是非とも専門分野を問わずお近くの方をお誘い合わせのうえ本シンポジウムにご参加頂き、震災の風化防止にご協力くださいますようお願い申し上げます。



写真：福島県農業総合センターで記念撮影